

本紙の朝刊最終面「TOKYO発」は毎日面白い。例えば、日曜日「焦土からの出発 東京の記憶 戦後65年日」は「マッカーサー元帥離日」(7月12日)、「M・モンロー取材秘話」(10月4日)のように、半世紀以上経た歴史を改めて伝えてくれるうえに、将来のジャーナリストを育てている筆者にとっても良質の教材になっている。土曜日「東京どんぶらこ」は、東京および首都圏に読者をもつ本紙ならではのフイーチャ。毎日楽しく読んでいます。15日から新聞週間が始まる。今年の標語は「新聞は地球の今が見える窓」。佳作の中にNEWSをもじって「日本が笑顔になる わたしが素敵になる」がある。「イチロー大リーグ2000安打 日本人初」(9月7日夕刊1面)や「公立中に球音戻った」(12日夕刊1面)などは「読む人の心が温かくなることで、世の中が少しでも明るくなったらしい」(日本新聞協会ハッピーニュースから)ニュースだ。

とかく新聞報道は暗い、事件事故、汚職、不正や倒産と悲しい話が多いと思われがち。イチローの記録はさらに続き、9年連続200安打(14日夕刊社会面「極み知らぬ探求心」と子どもたちに夢と希望を与えてくれる。そして8月20日夕刊社会面「二町一紙 福島に元氣夕刊」は、人口一万人前後の五町で七夕刊紙が発行されていることを伝えている。「読者の

新聞週間に改めて思う



鈴木 雄雅

距離感の近さが武器」、新聞の原点の一つともいえる。

話は冒頭に戻る。他紙と比べるとすぐ分かることだが、最終面がラ・テ欄(という呼び方は今は昔、現在はテレビ欄のみが主流)ではなく、ちょうど真ん中辺りでさっと抜くことができるように構成されているのも本紙の特徴だ。見開きの「芸能ワイド」はメディア批判の記事がしばしば載る。一日テレ「パンキシヤ!」誤報検証番組(8月25日)「NHK番組改変問題」(10月1日)などは大きな抜いたが、どちらかというと「こちら特報部」で扱ってほしい。前者の場合、実は偽証発覚前、岐阜県警が放映された番組を押収しようとする動きがあった。地元紙以外はほとんど触れられていない。

実は本紙のみでなく、他メディアの問題を扱う割には自メディア(新聞)についてはあまり記事にしたがらない傾向があるのではないか。もちろんそれらは紙面全体でカバーしていると言われればそれまでなのだが、「新聞の危機」「新聞が生き残れるか」といった現況で、放送産業の広告収入減や外国メディアの危機は取り上げられるが、いざ国内の新聞産業についてはどうだろうか。暗いニュースは嫌われる?

「知りたい 本当のことだから新聞」。二〇〇二年の新聞週間の標語だ。

(上智大学教授)

※この批評は最終版を基にしています。

新聞を **新** んで